

# 作曲家・一柳慧に聞く 20世紀のアメリカ・ロシアの現代音楽



今月の《定期》でアメリカとロシアの現代音楽を取り上げることにちなみ、アメリカに留学されて作曲家たちと交流のあった一柳慧先生に、現代音楽の潮流や本公演で取り上げる曲目の印象などについてお話を伺いました。

取材・文＝オヤマダアツシ（音楽ライター）

## 音楽と人柄が一致していたフェルドマン

——今回の《定期演奏会》では、アメリカの作曲家が二人、旧ソビエト出身の作曲家が二人取り上げられます。

今日の音楽をバランス良く配した選曲で、曲名も面白そうな作品が並んでいますし、指揮をする下野さんの意欲も伝わってきます。読響もずいぶん豪快なことをされるなと思いました。（笑）

——4人の中で一柳先生と最も関係が深いのは、ジョン・ケージの一派として頭角を現したモートン・フェルドマンですが、渡米された際（1952～61年）に交流していらいしますね。

ケージの音楽と本格的に向き合ったのは1957年でしたが、当時すでにフェルドマンはそのサークルにおりましたから彼とも会っていますし、ケージほどではありませんでしたが演奏会でもたくさん共演しています。彼は1926年生まれで、1912年生まれのケージより若かったけれど、図形楽譜を考案して使いこなしていました

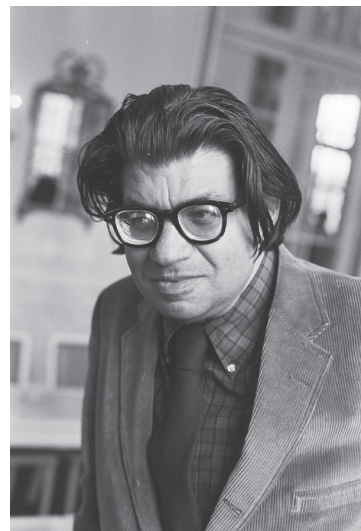
し、ケージもかなり影響を受けていました。それ以前にもヘンリー・カウエルという作曲家が、ピアノの内部奏法を含む実験的な作曲技法を取り入れていましたので、そうした前衛的な音楽のスクール（流派）が形成されていたのでしょう。面白かったのはそうした人たちが、東洋的と言ってしまっているのかわかりませんが、とても自由な感性で音楽を捉えていて、ヨーロッパ音楽との差を感じたものです。

——フェルドマンは、写真で見る限りかなり独特な雰囲気をかもし出していて、じっくりと腰を据えて何かを追求するようなタイプにも思えますが、実際にはいかがでしたか。

彼の容姿と音楽は、完全に一致すると思います。つまり、彼の音楽はとても静かで時間が止まるような感覚をおぼえますが、話し声もずいぶん小さくて動作もゆっくりなのです。極度の近眼で分厚い眼鏡をかけていましたが、そのせいで楽譜をこんな具合に（と、顔をかなり楽譜に近づける）見ていましたし、ピアノを弾いているときも顔と楽譜の距離が近いので大きな音で弾けないのです。それに近眼だと日常的な動作も慎重になりますから、動きが遅くなりますね。まさに、彼の音楽そのもののなのです。

——今回演奏される〈On Time and the Instrumental Factor〉（1969年）という曲も楽譜を見ると音数が少ない作品ですが、図形による部分はまったくなく、晩年まで続く点描風の作風へと転換した時期の作品です。

音と静けさによる音楽ですが、東洋的な「間」も感じられますね。静かだからこそお客様は一生懸命に聴きとろうとしようが、ドイツのオーケストラなどはそれが理解できないのか、自分が音を出さないところでこっそりビールを飲んでいるのを目撃したこともありました。フェルドマンは図形楽譜の創始者ではありますが、実は五線譜と付かず離れずの状態を保っていて、その代わり小節線を取り去った楽譜が多かったと思います。時間を自由に解放するよ



フェルドマン

うな狙いがあったのかもしれませんが。

——柳先生は、フェルドマンから直接的な影響を受けましたか。

私の曲はあんなに静かではありませんけれど(笑)、図形楽譜に関しては当時から多大な影響を受けました。音楽に対する考え方や姿勢がとても謙虚で、亡くなるまでそれを崩さずに生きたというところに感銘を受けています。一人の音楽家として立派なことであり、私もそうありたいと思っています。

## 新しい音楽と作曲技法を求めて渡米

——渡米される前後、1950年代の日本の音楽シーンについてお聞かせください。日本を発たれたのは1952年ですが、その当時ケージの名前は知られていましたか。

あくまでも私個人の記憶でお答えいたしますが、あまり知られてはいませんでしたし、私自身も知らなかったと記憶しています。12歳のとき(1945年)に戦争が終わってから右も左もわからないような状況でしたし、当時はまだピアノを弾いているというだけで白い目で見られたような時代です。外国からの新しい情報も入ってきませんでした。アメリカの音楽として知られていたのは、アーロン・コープランドに代表される大衆的な音楽だったと思います。ただ、戦後すぐにフランスではピエール・ブレーズが先鋭的な作品を発表し、十二音やセリー(音列)技法などが最先端だと捉えられていました。若い世代はそうした作品を未来への旗印のように考えていたのです。

——そのせいでもあるのでしょうか、当時はパリへ留学した方も多く、1950～60年代はフランス近現代音楽の香りが日本へ持ち込まれた時期でもありました。

私は原智恵子さんという方にピアノを習っていたのですが、彼女はフランスで勉強をされた方なので、新しい音楽の楽譜を見せていただいたり、レコードを聴かせてくださいましたから、ずいぶん勉強になりました。

——そうした中、一柳先生はなぜ留学先にアメリカを選ばれたのでしょうか。

当時パリへ留学するには、1年にたった一人だけという国費留学の枠を作曲家も演奏家も争っていましたから、そこに入るのは本当に難しかったのです。それに私は、<sup>あかつき</sup>黛敏郎さんなどもそうでしたが(アメリカの)進駐軍に出入りし

てピアノを弾いていましたので、アメリカへ渡る道筋がありました。とにかく日本にいても情報が入ってきませんし、まだ東京芸大の附属高校ありませんでしたので勉強するところもなく(創設は1954年)、新しいことを学ぶには国外へ出なければいけなかったのです。——話は逸れますが、その時代、ソビエトの音楽は日本にたくさん入っていたのでしょうか。

どうでしたか、私がさほど興味を抱けなかったせいもあるのですが、ショスタコーヴィチやプロコフィエフくらいしか印象に残っていません。ピアノを弾いていると、特にプロコフィエフの曲は自分で演奏することもあり

したので。なにしろソビエトは終戦間際(1945年8月)に不可侵条約を破って宣戦布告し、いきなり敵国となってしまったわけですから、感情的にわだかまりのようなものがあつたかもしれませんね。

## アメリカ的精神をもつアダムズ、音の密度が濃いグバイドゥーリナ

——渡米されてミネアポリスの音楽大学を経由し、ニューヨークのジュリアード音楽院へ籍を移されます。

十二音技法を本格的に学びたかったのですけれど、アメリカではさほど興味を抱けていなかったのか、ジュリアードでは教えてくれる先生が誰もいませんでした。これには失望しまして、講義も半分くらいは出なかったと記憶しています。それでも空いた時間にニューヨークの街を歩いていると、前衛アートを展示している画廊がたくさんあり、音楽以外の最先端文化をたくさん吸収できたのです。まさに街が私の先生でした。そうした失望と期待を感じていた頃に出会ったのがケージの音楽でしたから、ずっとヨーロッパの音楽を追いついたのです。ケージは1949年にコロンビア大学で禅宗の大家である鈴木



フェルドマンの楽譜を見ながら話す一柳先生 ©読響

大拙の講義を聴講していて、音楽も西洋的な考え方から脱却していましたから、その影響はさまざまなところに現れていたのでしょう。私はそうした日本的・東洋的な精神を、ケージから学んだような気さえしているのです。

——今回演奏されるジョン・アダムズやソフィア・グバイドゥーリナの音楽には、こういった印象をおもちでしょうか。

アダムズは直接会ったこともありますし、とても穏やかな人だという印象が強く、作品は一作一作どれも質が高い。サクソフォンやシンセサイザーを取り入れるなど、実にアメリカ的な精神を感じさせる作曲家です。グバイドゥーリナにはまだお目にかかったことがありませんけれど、彼女の作品は音の密度



が濃く、冒険も情熱も感じられ、とても力がある音楽を書く作曲家ですね。今回演奏される〈ペスト流行時の酒宴〉はまず曲名で興味を惹かれますし、他の作品同様にメッセージ性もあるでしょう。彼女もソビエトで生活していた時代は抑圧されて好きな音楽を書けず、映画や演劇の音楽を作ったようです

が、その経験は無駄になっていないでしょうし、むしろ生かされているのではないかと思います。私も実は一時期、アルベール・カミュの『ペスト』という小説をオペラにしようと思ったこともありましたが親近感をおぼえますし、彼女の作品を聴けるのが楽しみです。

——貴重なお話をうかがえました。ありがとうございました。

[追加情報] なお、ケージやフェルドマンとの出会いや在米中の様子、渡米前後の日本の状況や自身の生い立ちなどについては、より詳細なことが『一柳慧 現代音楽を超えて』（平凡社刊）にまとめられています。ご興味ある方はぜひご一読ください（オヤマダ）。

---

Profile 一柳慧（いちやなぎ・とし） 作曲家、ピアニスト

1933年、神戸市生まれ。19歳で渡米、ニューヨークでケージらと前衛的音楽活動を展開。帰国後は偶然性の導入や図形楽譜を用いた作品で、様々な分野に強い影響を与える。尾高賞（5回）、フランス文化勲章、サントリー音楽賞など受賞・受章多数。2018年には文化勲章を受章。現在、神奈川芸術文化財団芸術総監督。



## 2月の公演

熱狂のクライマックス! 俊英・山田が振るマーラー〈巨人〉



2/1 土 第224回 土曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

2/2 日 第224回 日曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

2/4 火 第25回 大阪定期演奏会  
フェスティバルホール(大阪) 19:00

指揮=山田和樹(首席客演指揮者)

ヴァイオリン=ネマニャ・ラドゥロヴィチ

マーラー:花の章 ハチャトゥリアン:ヴァイオリン協奏曲

マーラー:交響曲 第1番〈巨人〉

ピアノの鬼才ポゴレリッチが共演するシューマンの傑作協奏曲



2/11 火・祝 第117回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ  
横浜みなとみらいホール 14:00

2/13 木 第629回 名曲シリーズ  
サントリーホール 19:00

指揮=山田和樹(首席客演指揮者) ピアノ=イーヴォ・ポゴレリッチ

グリーグ:二つの悲しき旋律 シューマン:ピアノ協奏曲

ドヴォルザーク:交響曲 第7番

指揮者・上岡がピアノを弾き繰り広げる充実の室内楽



2/14 金 第25回 読響アンサンブル・シリーズ  
よみうり大手町ホール 19:30 (完売あり)

《上岡敏之と読響メンバーの室内楽》

ピアノ=上岡敏之

ショーン:ピアノ、ヴァイオリンと弦楽四重奏のための協奏曲

フォーレ:ピアノ五重奏曲 第2番

欧米で活躍するマイスターのブルックナー2番&名手テツラフのベルク



2/28 金 第595回 定期演奏会  
サントリーホール 19:00

指揮=コルネリウス・マイスター(首席客演指揮者)

ヴァイオリン=クリスティアン・テツラフ

ヘフティ:変化(日本初演)

ベルク:ヴァイオリン協奏曲〈ある天使の思い出に〉

ブルックナー:交響曲 第2番

## 2月公演の聴きどころ

2/1、2《土日マチネー》、2/4《大阪定期》 読響・首席客演指揮者の山田和樹が登場する。山田はモンテカルロ・フィルの芸術監督兼音楽監督、バーミンガム市響の首席客演指揮者を務めるなど、世界で活躍する日本が誇る次代の旗手だ。奇抜なファッションと圧倒的な実力で人気のラドゥロヴィチとともに、ハチャトゥリアンのヴァイオリン協奏曲を披露する。メインのマーラー〈巨人〉では、恋愛への憧れや失恋の苦悩など、多感な青年期の葛藤と揺れ動く感情を山田のタクトが鮮烈に描き出し、巨大なクライマックスを築く。

2/11《みなとみらい》、2/13《名曲》 世界屈指の巨匠ポゴレリッチが約3年ぶりに共演し、ロマンあふれるシューマンのピアノ協奏曲を奏でる。その独創的で異端ともいえる演奏は常に注目を浴びてきた。単独でのリサイタルは定期的に開かれているが、日本で協奏曲を聴く機会は稀有。山田×ポゴレリッチ、二人の才能が激突してどんな化学反応が起こるのか、期待が高まる。メインのドヴォルザークの交響曲第7番はボヘミアの民俗音楽的な語法とロマンティックな感情が融合した傑作。山田が躍動感あふれるリズムと温かみのあるサウンドを引き出す。

2/28《定期》 今年度末をもって首席客演指揮者を退任するマイスターが指揮台にあがる。シュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督を務め、ウィーン国立歌劇場、メトロポリタン歌劇場などで活躍する俊英が、スケールの大きな音楽でブルックナーの交響曲第2番を描き、荘厳な世界を築く。また、ベルクが早世した少女を追悼して作曲したものの、完成の4か月後に自らも病死し自身へのレクイエムともなってしまったヴァイオリン協奏曲〈ある天使の思い出に〉を取り上げ、ドイツの世界的ヴァイオリニストのテツラフがソロを務める。深い音楽性による説得力のある演奏が展開されるだろう。どうぞお聴き逃しなく。

(文責:事務局)

ドイツの名匠ヴァイグレが振る、ロマン派音楽名曲選



3/5 木 第630回 名曲シリーズ  
サントリーホール 19:00

3/7 土 第118回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ  
横浜みなとみらいホール 14:00

指揮=セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者)  
ヴァイオリン=カロリン・ヴィトマン

ヴェルディ: 歌劇《運命の力》序曲  
シューマン: ヴァイオリン協奏曲  
ブラームス: 交響曲 第1番

※当初の発表から出演者が一部変更されました。  
詳しくは32頁をご覧ください。

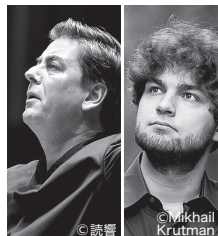
ヴァイグレが得意のR. シュトラウス《英雄の生涯》をドラマティックに描く



3/12 木 第596回 定期演奏会  
サントリーホール 19:00

指揮=セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者)  
ピアノ=ルーカス・ゲニューシャス  
ヒンデミット: 主題と変奏《4つの気質》  
R. シュトラウス: 交響詩《英雄の生涯》

ロシアの大器ゲニューシャスが弾く華麗なる《皇帝》



3/14 土 第225回 土曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

3/15 日 第225回 日曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

指揮=セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者)  
ピアノ=ルーカス・ゲニューシャス  
ベートーヴェン: ピアノ協奏曲 第5番《皇帝》  
R. シュトラウス: 交響詩《英雄の生涯》

スイスの巨匠ヴェンツァーゴが読響初登場、ブルックナーの神髄に迫る



4/8 水 第597回 定期演奏会  
サントリーホール 19:00

指揮=マリオ・ヴェンツァーゴ  
ヴァイオリン=シモーネ・ラムスマ  
バーバー: ヴァイオリン協奏曲  
ブルックナー: 交響曲 第3番《ワグナー》(第3稿)

“炎のマエストロ”が魂を込めるベートーヴェン《英雄》



4/25 土 第226回 土曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

4/26 日 第226回 日曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

指揮=小林研一郎 (特別客演指揮者)  
ヴァイオリン=福田廉之介  
サン=サーンス: ヴァイオリン協奏曲 第3番  
ベートーヴェン: 交響曲 第3番《英雄》

祝80歳! 小林研一郎が名手たちと奏でる三重協奏曲



4/28 火 第631回 名曲シリーズ  
サントリーホール 19:00

4/29 水・祝 第119回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ  
横浜みなとみらいホール 14:00

指揮=小林研一郎 (特別客演指揮者)  
ヴァイオリン=成田達輝  
チェロ=遠藤真理 (読響ソロ・チェロ)  
ピアノ=小林亜矢乃  
ベートーヴェン: 《エグモント》序曲  
ベートーヴェン: 三重協奏曲  
ベートーヴェン: 交響曲 第7番

お申し込み・お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390 (10時-18時・年中無休) <https://yomikyo.or.jp/>

## ■都民芸術フェスティバル

1/27 19:00  
月 東京芸術劇場コンサートホール

指揮=横山 奏  
ピアノ=横山幸雄

ベートーヴェン:ピアノ協奏曲 第5番〈皇帝〉  
ベートーヴェン:交響曲 第5番〈運命〉

[料金] 一般:A¥4,000 B¥3,000 C¥2,000  
学生:A¥3,000 B¥2,000 C¥1,000

[お問い合わせ] 日本演奏連盟事務局 03-3539-5131 (平日10~18時)

## ■福井公演

2/5 19:00 (18:30 から山田和樹によるプレ・トークあり)  
水 ハーモニーホールふくい 大ホール

指揮=山田和樹(首席客演指揮者)  
ヴァイオリン=ネマニャ・ラドウロヴィチ

マーラー:花の章  
ハチャトゥリアン:ヴァイオリン協奏曲  
マーラー:交響曲 第1番〈巨人〉

[料金] S¥7,000 A¥5,500 B¥5,000 バックシート ¥4,000  
※大学生まで半額となります。

[お問い合わせ] ハーモニーホールふくいチケットセンター 0776-38-8282 (平日10~17時)

## ■東京芸術劇場シアターオペラ vol.13

2/22 14:00  
土 東京芸術劇場コンサートホール

指揮=ヘンリク・シェーファー  
演出・振付=矢内原美邦  
出演=エヴァ・メイ、醍醐園佳、森山京子、宮里直樹、三浦克次、古橋郷平、  
三戸大久、高橋洋介、ジョン・ハオ、三浦大喜、杉尾真吾、井手壮志朗 ほか  
合唱=新国立劇場合唱団

ヴェルディ:歌劇〈椿姫〉全幕(日本語字幕付原語上演)

[料金] SS¥12,000 S¥10,000 A¥8,000 B¥6,000 C¥4,000  
D¥3,000 E¥1,500 高校生以下 ¥1,000

[お問い合わせ] 東京芸術劇場ボックスオフィス 0570-010-296 (10~19時/休館日を除く)

大切な楽器の輸送は、松田におまかせください。

### プロの実績

交響楽団の楽器を輸送して50余年の実績。

国宝級の美術品輸送も経験豊富です。

### プロの技

空調完備の専用車をご用意。

デリケートなピアノ・楽器・美術品を万全な体制で  
お届けいたします。

美しい音色を届ける、  
タクトを振りたい。



物流のコンダクター

松田運送株式会社 本社 〒105-0004 東京都港区新橋6丁目4番8号 ☎ 03-3432-1911

## 2020-21シーズンの聴きどころ③

全4回にわたって読響の名手たちが室内楽に取り組む《読響アンサンブル・シリーズ》。それぞれ日下紗矢子、鈴木優人、上岡敏之、石川滋を中心に、趣向を凝らしたプログラムが用意される。編成も多彩。刺激的な選曲が驚きと発見をもたらす。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

### 読響アンサンブル・シリーズ

Yomikyo Ensemble Series



シーズンの第1回は9月3日の《日下紗矢子リーダーによる室内合奏団》で幕を開ける。読響特別客演コンサートマスターの日下紗矢子が、ヘンデルとパーセルのバロック音楽に20世紀のブリテンを組み合わせたプログラムを披露する。バロック音楽への造詣も深い彼女が読響メンバーとどんな演奏をくりひろげるのか、期待が高まる。恩師を讃えたブリテンの出世作〈フランク・ブリッジの主題による変奏曲〉は聴きごたえ十分。

11月30日は《鈴木優人プロデュース〈四季〉 & ケージ》。読響指揮者／クリエイティブ・パートナーの鈴木優人が、ヴァイマルディの〈四季〉とジョン・ケージの〈ピアノとヴァイオリンのための6つのメロディ〉他を並べる。〈四季〉のヴァイオリンは読響コンサートマスターの長原幸太。鈴木優人は指揮にチェンバロにピアノと八面六臂の大活躍。こちらも

バロックと20世紀音楽がセットになった「一粒で二度おいしい」プログラム。

2021年2月19日は《上岡敏之と読響メンバーの室内楽》。指揮者でありピアノの名手でもある上岡敏之が、昨シーズンに続いて登場する。プログラムはフンメルの七重奏曲〈軍隊〉とヴァインベルクのピアノ五重奏曲。〈軍隊〉は古典派様式の作品でトランペットを含む珍しい編成が特徴的。ヴァインベルクはショスタコーヴィチと親交を結んだソ連の作曲家。近年再評価が進んでいる。

3月22日は《石川滋プロデュースの室内楽》。読響ソロ・コントラバス奏者石川滋が選んだのは、プロコフィエフの五重奏曲とドヴォルザークの管楽セレナード。管楽セレナードと言いつつもコントラバスやチェロも加わるのがこの曲。深く豊かな音色と大らかな田園情緒を堪能できるだろう。